

序に代えて

「サンキユー ブツダ」

小澤 千晶

『眞實心』はその年度に開催された「宗教講座」の講話録です。「宗教講座」は、豊かな人間性を涵養することを目的とした、本学の宗教行事の一つで、主として外部の先生をお迎えし、全学学生と教職員、そして地域の方を対象に年に五回開催してきました。ご登壇いただいた先生の中で講話録としてまとめることを認めてくださった講演を『眞實心』にまとめ、次年度初めのオリエンテーションで前年に講座を聴講した学生に配布しています。わたしは真宗文化研究所の一員として「宗教講座」の開催と『眞實心』の編集作業に携わってきました。昨年度も例年通り「宗教講座」を五回開催し、講話録編集に入りました。その編集の最終段階で新型コロナウイルス感染症が拡大しはじめました。そして、編

集を終えた『眞實心』が冊子となって大学に納入される頃には、オリエンテーションの延期が決定、その後、非常事態宣言の発出、二週間遅れで始まった新年度は全てがオンライン対応となりました。六月以降に一部対面授業が再開されましたが、学生に配布されるはずであった『眞實心』第四十一集は今も学内に眠っています（今春、一年遅れで配布できるはずです）。

この一年は新型コロナウイルスに翻弄された一年でした。不幸にも感染により亡くなられた多くの方、そのご家族、感染対策の中で看取らざるをえなかった医療関係者の方々の悲しみや無念を思うと言葉になりません。また、社会活動の抑制に伴い、思い描いていた未来を大きく変更せざるをえなくなった方、経済的に大きな損失を受けた方も多くおられます。いまこの世界に生きる人たちの誰もが、それ以前にまったく想定していなかった変化と混乱に直面しています。目に見えぬウイルスに対する恐怖、それぞれの生活の中での手探りで感染対策、情報の混乱、社会不安。世界中が同じ危機に直面し、まだ終わりは見えません。次々に起こる問題を前に、わたしたちが生きる社会の基盤はこれほどに脆いものなのかと圧倒される一年でした。

仏教の基本的な人間理解に「熏習くんじゆう」といわれるものがあります。「香氣が衣服に移りしみこんで、ついにはその衣服自身が香氣を出すに至るように、体や言葉、心のはたらきが心に残す影響作用」と説明されています（日本語国語大辞典、第二版）。つまり、日々の（意識的・無意識的な）振る舞いや心の働きが心の「クセ」となり、それがその人自身を作り出していくということの意味します（したがって、日々、より善い影響を受け、より善い振る舞いを習慣としていくことで、人格を陶冶していくという意味で、本学の教育訓でもあります）。感染対策として「新しい生活様式」「ニューノーマル」が求められていますが、自分自身のためにもなると知りつつも、その生活様式を苦痛に感じたり、時に反発したり、あるいは、社会的に責任ある立場のある人がその様式を破つたりするのは、それ以前の繰り返しの中で編み込まれた心の「クセ」を変えようとするの難しさからくるものと思われまます。このコロナ禍の中では、たとえ感染をせずにいられたとしても、わたしたちは常に表面上の振る舞いではなく、否応なく自分自身を変えていくことを求められているのです。この息苦しさを乗り越えるにはどうしたらいいのでしょうか。

二〇二一年に入って、二月の本学の「今月のことば」「サンキュー ブッダ」がSNSでちょっとした注目を集めました。正門脇の掲示板の写真を上げたツイートについてのコメ

ントを読んでいると、批判的なものは少なく、あるマンガをイメージしたりして「程よい軽さ」が注目を集めたようです。「今月のことば」には解説文も用意されています（本学HPにて解説を公開しています。 <https://gakuen.koka.ac.jp/archives/category/words>）。解説によると（わたし自身も最初に掲示板を見た時は、あるマンガを思い出したのですが、そうではなくて）、ある仏教学者がアメリカ滞在中に日曜学校で出会った少年が「南無阿弥陀仏」の意味することを、「サンキュー ブツダ」と言ったとのことでした。「報恩感謝」です。

わたしたちは誰もこれまでの人生で織り込んできた心の「クセ」を持っています。そして、それは人それぞれで異なります。つまり、社会には人の数だけ心の「クセ」が作り出した「当たり前」があり、容易に折り合うことができません。親鸞聖人は、自分の心の「クセ」に気づき、その「クセ」を思うようには善い方向に変えることができない自分自身に向き合われた方でした。そして、その内省から、自分の心の「クセ」を変換することができない煩惱具足の凡夫である自分を受け止めてくださる阿弥陀仏の存在を見出したのでした。その思いが「南無阿弥陀仏」「サンキュー ブツダ」に示されています。聖人は、自分の心の「クセ」に気づき、しかしそれに縛られることなく、その自分を手放すことが

できたのでしよう。それが「他力」ということかもしれません。

自分で自分の心の「クセ」に苦しむのではなく、時に自分自身を手放してみることが必要なかもしれません。長引くコロナ禍で辛い思いをされている方も多いと思います。ここに掲載された講話録が、自らを振り返ったり、心を少しでも軽くするきっかけになることがあれば望外の喜びであります。